

大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達に関連について¹⁾

岡 田 努

金沢大学文学部

本研究は大学生の友人関係の特徴と適応および自己像の関係を検討したものである。本研究では以下の変数について調査が行われた。友人関係、自己愛傾向、境界性人格障害傾向、自尊感情、現実自己像、理想自己像である。青年の友人関係のパターンを見出すためクラスタ分析により回答者を分類した。その結果 以下のような結果が得られた。1) 内面的な友人関係を取る青年群は、病理的自己愛や境界性人格障害傾向が低く、自尊感情得点が高いなど適応的であり、また社会的側面における現実・理想自己像間の差得点と自尊感情得点の間に負の相関関係が見られた。2) 現代的な友人関係を取る青年群は、不適応的で、身体的、活動的、社会的側面について、現実自己像と理想自己像の差得点と自尊感情の間に負の相関関係が見られたが、心理的側面との間では相関関係は見られなかった。

キーワード：友人関係，現代青年，理想自己像，現実自己像

問題と目的

1. 従来の青年観と現代の青年の友人関係

青年期における友人関係は、親密で内面を開示するような関係、あるいは人格の共鳴や同一視をもたらすような関係（以後「内面的友人関係」と称する）を特徴とし、これによって青年は新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進されるとされてきた（西平，1973, 1990 など）。こうした関係は、緊張や不安、孤独などの否定的感情を緩和・解消する「安定化機能」，「社会的スキルの学習機

能」，友人が自己の行動や自己認知のモデルとなる「モデル機能」などの機能を持ち（松井，1990），自我同一性探求の際の積極的関与（commitment）に意味を与える重要な他者（significant others）としての機能を持つ（Waterman, 1993）とされてきた。本研究ではこうした内面的友人関係を取る青年を「従来の青年観に合致する青年」と称する。

一方、近年こうした内面的友人関係を避け、友人から低い評価を受けないように警戒したり、互いに傷つけ合わないよう、表面的に円滑な関係を志向する傾向（以後「現代的友人関係」と記す）が指摘され（千石，1991；栗原，1996；大平，1995 など），実証的研究においても，こうした友人関係のあり方が見出されてきている（上野・上瀬・松井・福富，1994；岡田，1995, 1999b, 2002a, 2002b など）。岡田（1995）はこうした関係は、表面的で快活な関係を求める傾向、内面的関係を避ける傾向、相手に気を使う傾向に分類され、それぞれの特徴を強く持つ青年群（群れ関係群，関係回避群，気遣い関係群）が見られるとしている²⁾。

- 1) 本研究は平成9, 10年度科学研究費（奨励研究（A）課題番号9710082）「現代青年における対人関係希薄化と人格障害傾向の関連について」の研究補助を受けて実施された研究の一部である。
- 2) 岡田（2005）は自己の発達に影響のある友人とのコミュニケーション形態を調査した。その結果，携帯電話などが普及した現代においてもこうした友人関係の特徴が見られること，携帯電話やメールなどコミュニケーションよりも，自分の内面を開示する関わりが，自己意識に影響を与えることを見出している。このことから，コミュニケーションツールの変化とは別に，内面的関係と自己の関係を論じることに意義があると考えられる。

また岡田 (2002a) は、他者との深い関係を避け、対人退却傾向の高い群と、対人恐怖傾向が低い群を見出した。前者においては心情的に近い他者との関係において不安を示すなど、現代青年に特有な対人恐怖 (ふれあい恐怖) と共通する特徴が見出される一方、後者においては、表面的で円滑な友人関係を取る傾向が高かった。

先に述べたように内面的友人関係が青年の健康な成熟と関わりがあるのならば、これを避ける現代の青年は、適応の程度が低く、また自己の発達において未熟な特徴を示すと考えられるだろう。

2. 適応指標からみた現代の青年の特徴

適応は、自然的ないしは社会的環境に応じた行動を取る営み (詫摩, 1981) であり、その行動によって著しい葛藤や不安を経験することなく生活すること (佐治, 1993) と考えられている。また適応概念は、外的環境に対する適応だけでなく、理想自己に対する現実自己のあり方のような自分自身に対する適応の側面も含めた概念とされている (詫摩, 1981)。本研究ではこうした適応 (不適応) 概念の内でも、青年期の対人関係に関係した指標として以下のものを取り上げる。

(1) 人格障害的傾向 境界性人格障害や自己愛性人格障害は、親密な対人関係を維持することの困難さが特徴とされており (American Psychiatric Association, 1994 高橋他訳 1996)、現代青年の友人関係とも共通する特徴であると言えよう。山田・安東・伊藤・本木下 (1985) や山田 (1989) は、必ずしも臨床的な治療の対象となるほど重篤ではない一般の青年の中に「サブクリニカルな病理」と呼ばれる症状群が見られることを指摘している。これらの青年は境界性人格障害と類似した症状を示すが、その背景に情緒的発達の未熟さや対人的な不信感 (山田他, 1985) といった現代的友人関係と共通する特徴が指摘されている。また小塩 (1998) は、健常な青年においても、広く浅い友人関係を取る者ほど、病的な自己愛の特徴とされる「注目・賞賛欲求」が高いことを見出しており、

また岡田 (1999a) も、自己防衛的な友人関係を取る青年ほど、自己愛の病的側面が高いことを見出している。このように、現代青年の友人関係の特徴は、境界性人格障害傾向や自己愛性人格障害傾向との関連が予想される。

(2) 自尊感情 適応の指標としてはまた、自尊感情ないしは自己評価を上げることができる (遠藤, 1995; Grotevant, 1998)。自尊感情は、以下に述べるように対人認知や自己概念と深い関わりを持つことから、青年の友人関係のあり方と特に関連する適応指標であると考えられる。Leary, Tambor, Terdal, & Downs (1995) 及び遠藤 (1999) は、自尊感情は、対人関係において自分が排除されているか受け入れられているかについての指標 (ソシオメータ) であるとしている。すなわち個人は周囲の他者からのフィードバックによって、自己のあり方の適切性・妥当性を知り、それとの比較によって状況的自尊感情が喚起され、これが繰り返されることによって特性的自尊感情が形成される。よって、当該の集団との間で良好な関係を結ぶためには、その集団において適切な特性を持った人間であると思われるように自己を語り、振舞うことが必要となる。すなわち、当該集団において適切とされる自己概念を持ち、それに合致した行動を取る者は、集団に適応的であり高い自尊感情を持つものと考えられる (以下この考え方を「ソシオメータ説」と記す)

また、高垣 (1988) は、現代の青年が希薄で表面的な関わりを取るのは、こうした行動を取らないことで、自分が友人たちから茶化されたりバカにされることを回避するためであり、青年自身は必ずしも、こうした関係に満足している訳ではないとしている。また岡田 (1999b) においても、青年自身が理想とする関わり方に比べ、親友が取っている友人関係はより表面的であると認知しておりながら、親友に対する認知と同程度に青年自身も表面的な友人関係を取る傾向が見出された。

このことを解釈すると、現代の青年は、同年代

集団において内面的関係は適切とはみなされず、表面的友人関係が適切とされる関わり方であると認知していると考えられ、そうした認知に基づいて、適切であるとされる自己概念（「表面的関わりを取る自分」）を持つようとした結果、友人と同程度に表面的な関係を取るのではないかと考えられる。以上のように、自尊感情や当該集団への適応が、所属集団から適切とされる自己概念を持てるかどうかによって規定されているならば、表面的友人関係を取る（と認知している）青年ほど、自尊感情が高く適応的な傾向が高いものと予想される。

以上のように (1) と (2) からは、現代青年に特徴的な表面的友人関係が、青年の成熟や適応を阻害するものなのか、逆に、自尊感情を高め適応を促進するものであるかについて、相反する関係が予想される。そこで本研究では、この点を明らかにすることを第1の目的とする。

3. 青年の友人関係と自己概念・自尊感情の関係

青年期の内面的友人関係が青年の成熟と関わりがあるならば、そうした関係を避ける青年は、自己の発達においても未熟であることが考えられる。

一般に自尊感情や自己評価は、理想自己像と現実自己像の差が小さいほど高いとされている (Harter, 1983) が、Higgins (1987) は自己を評価する際の自己指針 (self guide) として動機づけられる自己の領域には、個人差があるとしている。また遠藤 (1992) は、個人にとって重要とみなされる項目では、そうでない項目に比べ、現実自己像と理想自己像の差と自尊感情との相関が大きいことを見出している。

発達的には、幼児期・児童期においては身体的特徴などを中心とした可視的・表層的属性に対する自己理解が中心であり、青年期以降には形式的操作等の発達を背景として、心理的、深層的理解など不可視的属性への自己理解へと移行するとされている (Rosenberg, 1986; 佐久間・遠藤・無藤, 2000)。Damon & Hart (1982) も、幼児期には名

前、身体など物理的側面を中心とした自己把握 (physical self)、児童期には、行動や能力など活動性を中心とした自己把握 (active self)、青年期初期には対人関係など社会的側面による自己把握 (social self)、青年期後半には個人の感情、性格特性、信念など心理的側面による自己把握 (psychological self) とやはり次第に抽象的で不可視的な属性への変化を述べている。

このように、意識が向けられやすい自己の側面には個人差や発達の違いが見られる。また自尊感情と関係のある現実・理想自己においても、その自己の領域 (側面) には発達の相違があることが考えられる。よって、現代的友人関係を取る青年が内面的友人関係を取る青年に比べて、自己の発達程度がより低い段階にあるならば、青年期以降において重視される「心理的」、「社会的側面」よりも、それ以前の段階において重視される表層的側面 (活動、身体的側面) において、現実自己像－理想自己像の差と自尊感情の相関関係が高いことが考えられる。

よって本研究では、発達段階差そのものの検討に進む前段階として、青年期の後期段階である大学生期に焦点を当て、現代的友人関係を取る青年と取らない青年の間での、自己像と自尊感情の関係について検討することを第2の目的とする。

以上をまとめ、本研究では次のような問題点について検討する。

1. 現代的友人関係を取る青年は、そうでない青年に比べ、i) 人格障害傾向、低い自尊感情が見られるのか、ii) あるいはソシオメータ説から説明されるように、そうした青年は高い自尊感情と適応を示すのかを検討する。

2. 問題点1において i) が成り立つ場合、現実自己像－理想自己像間の差異と自尊感情の相関関係は、現代的友人関係を取る青年では、青年期以前で重視されやすい身体的、活動的側面において顕著に見られ、内面的友人関係を取る青年は、青年期以降で重視されやすい心理的および社会的側

面において相関関係が見られることが予想される。他方 ii) が成り立つ場合には、現代的友人関係を取る青年と内面的友人関係を取る青年の違いは見られず、いずれも心理的および社会的側面における相関関係が顕著に見られ、身体的および活動的側面での相関関係は低いだろう。

以上の点について検証を行う。

方 法

尺 度

1. 現代的友人関係（友人関係尺度） 岡田 (1995, 1999b) で用いられた現代青年の友人関係の特徴を測定する尺度は、必ずしも安定した構造が得られないことが指摘されており（岡田, 1999a; 片山, 2001）、これに再検討を加えた「現代青年に特有な友人関係の取り方に関する尺度項目」（岡田, 1999a）（以下「友人関係尺度」と記す）を用いた。本尺度の信頼性は岡田 (1999a) において確認されており、また岡田 (2005) で友人に対する具体的行動との間で相関が見られ、併存的妥当性が一部確認されている。本尺度は、内面的友人関係を避け、互いの内面に踏み込まないような関わり方を示す「自己閉鎖」、友人から自分が否定的に評価されないよう気をつかう関わりを示す「自己防衛」、友人を不快にさせないよう気をつかう関わりを示す「友だちへのやさしさ」、楽しく円滑な関係を取る「群れ」の下位尺度から成る計42項目である。

2. 適応指標 (1) 自己愛人格目録 (Narcissistic Personality Inventory: NPI) Raskin & Hall (1979) が作成し、小塩 (1998) が邦訳の上、信頼性・因子的妥当性を確認した尺度である。本研究ではこのうち小塩 (1998) の因子分析において因子負荷量.4以上であった33項目を用いた。強い自己肯定を表す「優越感・有能感」、他者の注目的になったり権力志向などの内容からなる「注目・賞賛欲求」、意見や決断力をあらわす「自己主張性」の

下位尺度から成る。以下NPIと記す。

(2) 病理的自己愛に関する尺度 Lapan & Patton (1986) にもとづき、岡田 (1999a) が作成し信頼性および併存的妥当性を確認したものである。岡田 (1999a) では、他者からどう思われるかを過度に気にする「他者評価過敏」の下位尺度（8項目）についてのみ信頼性が得られていたため、本研究ではこの下位尺度のみを用いた。

(3) ボーダーライン・スケール (Borderline Scale: BSI) 個人の境界性人格障害傾向を測る目的で Conte, Plutchik, Karasu, & Jerrett (1980) が作成し、町沢 (1989) が邦訳の上、信頼性を確認した尺度である。本研究では患者群との判別に関わる偏相関係数が高いことから妥当性が認められた16項目を用いた。以下BSIと記す。

(4) 自尊感情 Rosenberg (1965) が作成し、山本・松井・山成 (1982) が邦訳の上、因子的併存的妥当性を確認した尺度で、個人の全体的な自尊感情の水準を測るものである。10項目から成り岡田 (1987) においても尺度の一次元性が確認されている。

3. 側面別自己概念 岡田 (2002b) において作成された自己の諸側面に関する項目である。本項目は、山本他 (1982) が見出した自己認知の諸側面から、調査項目として施行可能な領域として、社交、スポーツ能力、知性、やさしさ、容貌、趣味や特技、まじめさの各領域の項目について中学・高校・大学生の回答に基づいて因子分析を行ったもので、Damon & Hart (1982) が客体的自己の側面として記述したものに对应して、「心理的側面」（4項目）、「社会的側面」（6項目）、「身体的側面」（4項目）、「行為的側面」（6項目）の各因子が得られている（なお項目の表す構成概念から考えて本研究では「行為的側面」は「活動的側面」と名称を改めて用いた）。「心理的側面」は主に性格的なまじめさ、「社会的側面」は社交性、「身体的側面」は外見的な魅力、「活動的側面」は

スポーツなどの得技があること、などの内容の項目から成っている³⁾。現実の自分、及びなりたいと思う自分に対する評定を求めた（以下「現実自己像」「理想自己像」と記す）。

以上はすべて「全くあてはまらない（1点）～とてもあてはまる（6点）」の6件法により実施された。具体的な質問文については資料に掲載した。

回答協力者

関東甲信越及び中部地方の4年制大学4大学学部学生261名（うち男子96名、女子165名、18歳から25歳、平均年齢20.4歳、標準偏差1.44）。

調査時期

1998年12月から1999年6月。

結果と考察

1. 尺度項目の検討

友人関係尺度については岡田(1999a)において.4以上の負荷量を示した35項目を本研究の解析に用いた⁴⁾。また岡田(1999a)において因子負荷量の高い項目を中心に下位尺度名を見直し、原尺度の「自己防衛」を「傷つけられることの回避」、「友だちへのやさしさ」を「傷つけることの回避」、「群れ」を「快活的関係」と改めた（「自己閉鎖」については変更なし）。Cronbachの α 係数は、「自己閉鎖」で.838、「傷つけられることの回避」で.765、「傷つけることの回避」で.806、

3) なお、こうした自己の諸側面は、佐久間・遠藤・無藤(2000)でも指摘されるように、必ずしも独立したものではなく、相互に重複した内容が想定される。本研究で用いた尺度項目についても、岡田(2002)ではPromax斜交回転によって得られており、因子間が独立していないことを前提としている。

4) 岡田(1999a)では.35以上の負荷量を持つ項目を各因子を代表する項目として、合成得点を求めていたが、本研究で改めて α 係数を求めたところ全体に低いため、.4以上の負荷量の項目を用いた。また岡田(1999a)では「快活的関係」下位尺度にこの他「みんなと一緒にいる」項目が.4以上の負荷量を示していたが、本研究では同項目を加えた α 係数は.693と低いため、解析から除外した。

「快活的関係」で.770となりほぼ信頼性が確認された。NPIについても先行研究から項目を減じたため、再度下位尺度ごとの α 係数を求めたところ、「優越感・有能感」で.856、「注目・賞賛欲求」で.822、「自己主張性」で.722となり、「自己主張性」についてはやや低いものの一応の信頼性が確認された。病理的の自己愛（他者評価過敏）については $\alpha=.782$ となり一応の信頼性が得られた。BSIについては、町沢(1989)では2件法データによる信頼性が検討されていたため、改めて α 係数を求めたところ $\alpha=.889$ となり信頼性が確認された。自尊感情尺度についても先行研究で信頼性が得られていなかったため α 係数を求めた結果、 $\alpha=.886$ となり信頼性が確認された。側面別自己概念については、現実自己像、理想自己像をそれぞれ別個のケースの回答とみなして、回答者人数 $\times 2$ のケース数による α 係数を求めた。その結果「心理的側面」で.760、「社会的側面」で.907、「身体的側面」で.916、「活動的側面」で.881となり信頼性が確認された。

2. 友人関係と適応指標との関係

第1の問題点について検討するために、1) まず友人関係尺度と各適応指標の関係について単純相関を求めた。さらに2) 友人関係の取り方と適応の非線形的な関係を検討するために、友人関係尺度の得点に基づいたクラス分析を行い、クラス間での適応指標の度合いを比較した。

1) 単純相関 Table 1に友人関係尺度と各適応指標の相関を示す。ここに見られるように「傷つけられることの回避」についてはNPIの「注目・賞賛欲求」との間で $r=.408$ 、「他者評価過敏」との間で $r=.564$ 、BSIとの間で $r=.357$ 、自尊感情との間で $r=-.358$ の相関関係が見られた。「傷つけることの回避」下位尺度では、「他者評価過敏」との間に $r=.382$ の相関関係が見られた。しかし表面的関係を指向する「快活的関係」や内面的関係を避ける「自己閉鎖」については適応指標との間には.3未満の相関しか得られず、明確な関連は示

Table 1 友人関係尺度と各適応指標との相関

適応指標\友人関係		自己閉鎖	傷つけられる ことの回避	傷つける ことの回避	快活の関係
[自己愛人格目録(NPI)]					
優越感 ・有能感	<i>r</i>	-.089	.041	.145*	.223**
	<i>n</i>	252	253	253	255
注目・賞賛 欲求	<i>r</i>	.064	.408**	.251**	.206**
	<i>n</i>	256	258	258	260
自己主張性	<i>r</i>	-.152*	-.279**	-.086	.186**
	<i>n</i>	256	258	258	260
[病理的自己愛]					
他者評価過敏	<i>r</i>	.000	.564**	.382**	.209**
	<i>n</i>	253	253	254	256
[ボーダーライン・スケール (BSI)]	<i>r</i>	.208**	.357**	.012	-.099
	<i>n</i>	253	254	255	257
[自尊感情]	<i>r</i>	-.202**	-.358**	-.033	.240**
	<i>n</i>	254	255	256	258

無相関検定 * $p<.05$, ** $p<.01$

当該変数に欠損値を持つ回答者をペア単位で除去したため人数にはばらつきがある。

されなかった。以上のように、相関のレベルでは、青年の友人関係と適応の間で一意的な関係は見出されなかった⁵⁾。

2) 友人関係のパターンによる回答者の分類

友人関係尺度の項目得点を変量とし、変量間のコサインを類似性指標とした平均連結法によるクラスタ分析によって回答者を分類した結果、距離係数.18を指標として3クラスタが得られた⁶⁾。投入変数である友人関係尺度の標準得点についてのクラスタごとの平均値をTable 2 (Z欄)に示す。なおクラスタ間での男女比については有意な差は

- 5) 友人関係尺度の「傷つけられることの回避」下位尺度と病理的自己愛尺度の「他者評価過敏」下位尺度との間では $r=.564$ の高い相関関係が見られたが、これは項目内容が類似していることによるものと考えられる。
- 6) なおこうした分析では一般的には下位尺度得点を用いたWard法が用いられることが多いが、変量間のユークリッド距離に基づく同法は得点の平行移動の影響を受けやすく、応答傾向を反映したクラスタが形成されやすいため、本研究では表記の方法を用いた。

見られなかったため($\chi^2(2)=4.31$)、男女を合わせて以下の分析を行った。

各クラスタの友人関係尺度および適応指標得点の平均値を求め、クラスタ間での一元配置分散分析の結果、NPIの「優越感・有能感」及び「自己主張性」下位尺度以外は $p<.01$ でクラスタ間で有意な差が見られたためTukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行った(Table 2)。

その結果、第1クラスタは、内面的友人関係を避ける傾向である「自己閉鎖」得点が高いために他の下位尺度の標準得点に比べ最小であった。すなわち、本クラスタは内面的友人関係を取る傾向が高いと言え、従来の青年観に合致する特徴を持つ群と考えられる。適応指標の得点については以下の通りであった。すなわち、自尊感情は第2クラスタよりも有意に高く、他者評価過敏得点およびNPIの「注目・賞賛欲求」は第3クラスタよりも有意に低く、BSIが第2,3クラスタよりも低かった。NPIのうち「自己主張性」は比較的健康な側面、「注目・賞賛欲求」は病理的な側面との関連が指摘さ

Table 2 全回答者及び各クラスタでの平均・標準偏差およびクラスタ間での分散分析結果
(友人関係尺度下位尺度得点については各クラスタの平均標準得点をZ欄に示した)

		全体	第1 クラスタ	第2 クラスタ	第3 クラスタ	F値(上段) 多重比較結果(下段)
人数(男, 女)		261 (96, 165)	94 (27, 67)	115 (49, 66)	44 (16, 28)	
[友人関係]						
自己閉鎖	平均	55.265	47.372	62.191	54.364	$F(2, 250)=85.599^{**}$ 1<3<2
	SD	10.467	8.021	7.521	9.686	
	Z		-.754	.662	-.086	
	n	257	94	115	44	
傷つけられる ことの回避	平均	32.690	27.309	34.626	38.818	$F(2, 250)=79.014^{**}$ 1<2<3
	SD	7.034	5.576	5.446	5.558	
	Z		-.765	.275	.871	
	n	259	94	115	44	
傷つけること の回避	平均	41.116	37.819	40.643	49.182	$F(2, 250)=63.181^{**}$ 1<2<3
	SD	6.903	6.249	5.348	4.427	
	Z		-.478	-.068	1.169	
	n	259	94	115	44	
快活的關係	平均	12.498	13.043	11.304	14.136	$F(2, 250)=23.423^{**}$ 2<1<3
	SD	2.784	2.643	2.620	2.247	
	Z		.196	-.429	.588	
	n	261	94	115	44	
[自己愛人格目録(NPI)]						
優越感・有能感	平均	41.157	40.462	41.216	43.068	$F(2, 245)=1.149$
	SD	9.529	9.996	9.137	8.745	
	n	255	93	111	44	
注目・賞賛欲求	平均	28.846	27.234	29.237	31.364	$F(2, 249)=6.399^{**}$ 1=2<2=3
	SD	6.641	6.671	6.594	5.835	
	n	260	94	114	44	
自己主張性	平均	32.139	33.287	31.596	31.318	$F(2, 249)=2.636$
	SD	6.006	6.388	5.645	5.750	
	n	260	94	114	44	
[病理的自己愛]						
他者評価過敏	平均	30.113	28.462	29.640	34.705	$F(2, 246)=15.719^{**}$ 1=2<3
	SD	6.522	6.337	6.037	6.227	
	n	256	91	114	44	
[ボーダーライン ・スケール(BSI)]						
平均	平均	42.214	38.247	44.381	43.409	$F(2, 247)=6.017^{**}$ 1<3=2
	SD	13.348	12.387	13.272	13.591	
	n	257	93	113	44	
[自尊感情]						
平均	平均	38.112	40.435	36.728	37.886	$F(2, 247)=5.133^{**}$ 2=3<3=1
	SD	8.646	8.401	8.119	8.927	
	n	258	92	114	44	

** $p<.01$

当該変数に欠損値を持つケースを除外しているため人数にはばらつきがある。

れている(小塩, 1987)。以上のことから、内面的友人関係を取る青年は比較的適応的な傾向が見られると言えよう。(さらに付言すれば、有意な差はないものの、第1クラスは、自尊感情の値は3群中最大であり、自己愛の病理的な側面であるNPIの「注目・賞賛欲求」やBSIの得点は3群中最も低かった。)

第2クラスは、友人関係尺度の「自己閉鎖」得点が最大で、「快活的関係」得点は最低で標準得点も負の値を取っており、友人関係から回避し、自分にこもる傾向を有する青年と言える、岡田(1995, 2002a)においても同様の特徴を有する青年群が見出されており、次に述べる第3クラスとともに現代の特徴の一つの型を示す群と考えられる。適応指標においては、自尊感情が、比較的適応的と考えられる第1クラスよりも有意に低く、BSIは第1クラスよりも高かった。このように本群では、自己愛以外の指標において、不適応的な傾向が見出された。

第3クラスは、友人関係尺度の「傷つけることの回避」の標準得点が3クラス中唯一正の値をとり、多重比較では「傷つけられることの回避」、「快活的関係」と共に3クラス中最大であった。すなわち自他共に傷つくことを回避しつつ、円滑な関係を志向するなど、現代青年に特有な友人関係を取る群と考えられる。適応指標については、自己愛の病理的な側面である他者評価過敏得点の他のクラスよりも高く、またNPIの「注目・賞賛欲求」の得点も第1クラスよりも高かった。こうした結果は、広く浅い友人関係を取る者ほど「注目・賞賛欲求」が高いとしている小塩(1998)とも一致するものである。Gabbard(1994)及び狩野(1994)は、自己愛性人格障害は、他者の目を気にして内気で過敏な“hypervigilant(周囲を過剰に気にする)”タイプと、周囲を気にせず傲慢でサディスティックな誇大自己を主張する“oblivious(周囲を気にしない)”タイプの2つの対極の間に位置づけられるとしている。自己愛

的で自他共に傷つくことを恐れるといった特徴を持つ本クラスは、“hypervigilant”タイプに類似した特徴を持つと言えよう。

3. 自己像と自尊感情の関係

第2の問題点についての検討を行うため、各クラスにおける、側面別の現実自己像・理想自己像の差異と自尊感情と関係について以下のように解析した。すなわち側面別自己概念について、現実自己像、理想自己像の間のユークリッド距離をDスコア($D = \sqrt{\sum d^2}$)によって求め、自尊感情得点との間のピアソンの相関係数をクラスごとに求めた(Table 3)。その結果、第1クラスでは「社会的側面」で $r = -.520$ の関係が見られたが他の側面では $r = -.280 \sim -.305$ で明確な関連性は認められなかった。また第2、第3クラスでは、「社会的側面」で $r = -.423$ 及び $-.589$ 、「身体的側面」で $r = -.464$ 及び $-.427$ と.4以上の相関係数が見られ、「活動的側面」でも $r = -.381$ 及び $-.364$ の相関係数が見られた。また「心理的側面」での相関係数は各クラスとも.2台で高い関連性は見られなかった。以上のように、内面的関係を特徴とする第1クラスでは「社会的側面」でのDスコアがとりわけ自尊感情と明確に関係し、現

Table 3 側面別自己概念およびDスコアと自尊感情との間の相関

		第1 クラス	第2 クラス	第3 クラス
[現実自己像-理想自己像]				
心理的側面	<i>r</i>	-.280**	-.223*	-.260
	<i>n</i>	92	113	44
社会的側面	<i>r</i>	-.520**	-.423**	-.589**
	<i>n</i>	91	111	44
身体的側面	<i>r</i>	-.281**	-.464**	-.427**
	<i>n</i>	92	113	44
活動的側面	<i>r</i>	-.305**	-.381**	-.364*
	<i>n</i>	92	113	44

無相関検定 * $p < .05$, ** $p < .01$

当該変数に欠損値を持つ回答者をペア単位で除去したため人数にはばらつきがある。

代的友人関係を示す第2, 第3クラスタにおいては「身体的側面」及び「活動的側面」でのDスコアと自尊感情の間にも相関関係が見られたことは、当初の予想に部分的に合致するものである。また、「社会的側面」においては、すべてのクラスタで相関関係が見られた。先に述べたように「社会的側面」は、青年期において意識が向けられやすい側面の一つである(Damon & Hart, 1982)が、本研究の結果は、そうした側面での現実-理想自己像間の差異は青年一般において自尊感情との関わりを持つことが示唆される。一方同様に青年期に意識が向けられやすいと考えられてきた心理的側面においては、自尊感情との関連性はいずれのクラスタにおいても小さなものであった。このことは、以下のようにも考えられる。すなわち、他者の評判が個人に大きな意味を持つ日本社会(柄谷, 2000)においては、「社会的側面」に示されるような他者との関係性が主に自尊感情と関わり、「心理的側面」で代表されるような個人内部の特性による自己一致感とは必ずしも関わらないことが考えられる。しかしながら、本研究で用いられた「心理的側面」の項目が、「性格的なまじめさ」という限定された内容であることも、自尊感情との関連性が見られなかった理由として考えられる。よって項目を追加するなどによって測定する内容を広げるとともに、国際比較を含めた今後の検討が必要となるだろう。

4. 各結果を総合した考察と展望

以上のように、内面的関係を取る青年(第1クラスタ)は全体的に適応的な特徴が見られ、反対に現代的友人関係を取る青年(第2, 第3クラスタ)は不適応的な傾向が見られた。第1クラスタにおける結果からは、青年期の友人関係が安定化機能(松井, 1990)をもたらす役割そのものは変わっていないことを示唆するものであり、当初の予想(1-i)に近い結果となった。しかし、その不適応のあり方にも、友人関係の取り方による相違が見られた。すなわち、内面的関係を避ける第2

クラスタでは、全般的な不適応が見られるのに対して、自他が傷つくことを避けようとする傾向が顕著な第3クラスタでは、病的側面における自己愛の特徴が顕著に見られていた。小塩(2004)は、自己愛的な傾向が高い青年は、他者との比較を通じて自分自身に対する肯定的感覚を得ようとするとしている。また自己愛傾向の内、注目・賞賛欲求の高い青年は友人から理解・評価されたい欲求が高いことも示している。すなわち本クラスタの青年は、自他を傷つけないように警戒することで、他者から肯定的評価を受けるような関係を維持し、かろうじて自尊感情の低下を防いでいると考えられる。一方第1クラスタの青年は、友人に対する警戒心が低く、友人から受容されていると感じており、その現れ(ソシオメータ)として高い自尊感情が示されていると考えられる。また第2クラスタの青年は、内面的関係を避けることによって自己のあり方の適切さを感じるのではなく、周囲から排除される懸念から内面的関係を回避していて、それが低い自尊感情として現れているとも考えられる。このことは当初の予想とは異なる形ではあるが、現代青年の友人関係の取り方と自尊感情についてソシオメータ説による説明が可能となると言えよう。これらの点について、今後、受容感や行動の動機を含めた詳細な検討が必要となるだろう。

また自尊感情との関係では、現代的友人関係を取る第2, 第3クラスタで、発達の低い段階で重視されやすい自己の側面について、現実-理想自己像間の差異と自尊感情との相関関係が見出された。これは当初の予想(2-i)に部分的に合致する結果であり、内面的関係を取ることが自己の発達に影響を与える可能性を示唆するものである。しかし本研究のような相関データからは因果関係について確定的なことは言えず、縦断的研究を含めた、異なる年代での調査による、発達の異なる変容についての検討が必要となるであろう。

臨床的な観点からは次のようなことが考えられ

る。自己閉鎖的な特徴を示す第2クラスは「社会的ひきこもり」との連続性をもつ群のように見える。しかし、「社会的ひきこもり」を示す青年の特徴としては、他者評価に過敏で傷つけられる恐れが強いなど、第3クラスで見出されたような特徴が指摘されている(斎藤, 1998)。このことは「社会的ひきこもり」を自己愛の病理としてとらえる可能性を示唆するものと考えられよう。

引用文献

- American Psychiatric Association (1994). *Diagnostic and statistical manual for mental disorders*. 4th ed. Washington: American Psychiatric Association. (アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸(訳) (1996). DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Conte, H., Plutchik, R., Karasu, T., & Jerrett, I. (1980). A self report borderline scale: Discriminative validity and preliminary norms. *Journal of nervous and mental disease*, **168**, 428-435.
- Damon, W., & Hart, D. (1982). The development of self-understanding from infancy through adolescence. *Child Development*, **53**, 841-864.
- 遠藤由美 (1992). 自己認知と自己評価の関係: 重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討 教育心理学研究, **40**, 157-163.
- 遠藤由美 (1995). 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論 社会心理学研究, **11**, 134-144.
- 遠藤由美 (1999). 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, **39**, 150-167.
- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV Edition*. Washington: American Psychiatric Press.
- Grotevant, D. (1998). Adolescent development in family contexts. In W. Damon (Ed.), *Handbook of child psychology*. Vol. 3, 5th ed. New York: John Wiley & Sons. pp. 1097-1149.
- Harter, S. (1983). Developmental perspectives on the self-system. In P. H. Mussen (Ed.) *Handbook of child psychology*. Vol. 4, 4th ed. New York: John Wiley & Sons. pp. 275-385.
- Higgins, E. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319-340.
- 柄谷行人 (2000). 倫理 21 平凡社
- 狩野力八郎 (1994). 自己愛性人格障害 シリーズ精神科症例集 5 神経症・人格障害 中山書店 pp. 274-285.
- 片山美由紀 (2001). 友人関係尺度 堀 洋道(監修) 吉田富二雄(編) 心理測定尺度集II サイエンス社 pp. 166-169.
- 栗原 彬 (1996). やさしさの存在証明——若者と制度のインターフェイス—— 増補新版 新曜社
- Lapan, R., & Patton, M. J. (1986). Self-psychology and the adolescent process: Measures of pseudoautonomy and peer-group dependence. *Journal of Counseling Psychology*, **33**, 136-142.
- Leary, M., Tambor, E., Terdal, S., & Downs, D. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 518-530.
- 町沢静夫 (1989). ボーダーライン・スケールの日本人への適用: 日本における境界人格障害の診断妥当性の検討 精神科治療学, **4**, 889-899.
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能「青年期における友人関係」 斎藤耕二・菊池章夫(編著) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 pp. 283-296.
- 西平直喜 (1973). 青年心理学 塚田 毅(シリーズ編) 現代心理学叢書7 共立出版
- 西平直喜 (1990). 成人になること: 生育史心理学から 東京大学出版会
- 大平 健 (1995). やさしさの精神病理 岩波書店
- 岡田 努 (1987). 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, **35**, 116-121.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- 岡田 努 (1999a). 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, **9**, 29-39.
- 岡田 努 (1999b). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, **47**, 432-439.
- 岡田 努 (2002a). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, **10**, 69-84.
- 岡田 努 (2002b). 友人関係の現代的特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達の研究 金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇, **22**, 1-38.
- 岡田 努 (2005). 現代青年の友人関係・ライフイベントと自己の発達に関する研究 金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇, **25**, 15-32.

- 小塩真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290.
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- Raskin, R., & Hall, C. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Rosenberg, M. (1986). Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls, & A. G. Greenwalt (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol. 3. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 107-136
- 斎藤 環 (1998). 社会的ひきこもり：終わらない思春期 PHP 研究所
- 佐治守夫 (1993). 適応 加藤正明 他 (編) 新版精神医学事典 弘文堂 p. 561.
- 佐久間 (保崎) 路子・遠藤利彦・無藤 隆 (2000). 幼児期・児童期における自己理解の発達：内容的側面と評価的側面に着目して 発達心理学研究, **11**, 176-187.
- 千石 保 (1991). “まじめ”の崩壊：平成日本の若者たち サイマル出版会
- 高垣忠一郎 (1988). 自分をつくる 心理科学研究会 (編) かたりあう青年心理学 青木書店 pp. 55-82.
- 詫摩武俊 (1981). 適応 東 洋 他 (編) 心理学事典 平凡社 p. 604.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **42**, 21-28.
- Waterman, A. S. (1993). Developmental perspectives on identity formation: From adolescence to adulthood. In J. E. Marcia, A. S. Waterman, D. R. Matterson, S. L. Archer, & J. L. Orlofsky, (Eds.), *Ego identity: a handbook for psychosocial research*. New York: Springer-Verlag. pp. 42-68.
- 山田和夫 (1989). 境界例の周辺：サブクリニカルな問題性格群 季刊精神療法, **15**, 350-360.
- 山田和夫・安東恵美子・伊藤裕子・本木下道子 (1985). 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究：幼稚な行動化の突出する群 安田生命社会事業団研究助成論文集, **21**, 222-237.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

Friendship Style, Adaptation, and Perceived Selves in Contemporary College Students

Tsutomu OKADA

Faculty of Letters, Kanazawa University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2007, Vol. 15 No. 2, 135-148

This study explored the characteristics of friendship, adaptation, and self images in contemporary young adults. The following variables were examined in this study: friendship style, narcissistic and borderline personality tendencies, self esteem, and self images including real and ideal selves. Cluster analysis was used to find their friendship styles. Results showed that those who had intimate friendship style were better adapted: they were low in pathology in terms of narcissistic and borderline personality tendencies, and high in self esteem. Also, the size of discrepancy between real and ideal self images concerning their social interaction with others had a negative correlation with self esteem. In contrast, those who were high on the characteristics of contemporary friendship style were less well adapted, and discrepancy between self images concerning their appearance, daily activity, and social interaction had a negative correlation with self-esteem, but discrepancies concerning their psychological domain had no correlation with self esteem.

Key words: friendship, young adult, ideal self, real self, self images

資料 本研究で用いた質問項目 (1)

質問文

以下の質問について、それがどの程度「あてはまるか」あるいは「あてはまらないか」を、1~6の段階の一つを選び○印をつけてください。おおよその段階を下に例として示します。

- | | | |
|-------------|-----------|--------------|
| 1 全くあてはまらない | 2 あてはまらない | 3 やや あてはまらない |
| 4 やや あてはまる | 5 あてはまる | 6 とても あてはまる |

あなた自身についてお尋ねします。以下のそれぞれの質問について、あなたはどの程度あてはまりますか？ それぞれあてはまる段階に○印をつけてください。

自己愛人格目録 (NPI) (小塩 (1998) において .4 以上の因子負荷量を持つ項目)

【優越感・有能感】

- 自分自身では要領もいしい賢明さも備えていると、私は思っている
- 周りの人はたいい私の権威を認めてくれる
- 私は才能に恵まれた人間であると思う
- 周りの人達が自分のことをよい人間だといってくれるので、自分でもそうなんだと思う
- 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる
- 私は周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所をいくつか持っている
- 私は生まれつき、リーダーとしての素質を持っている
- 私は周りの人達より、ずばぬけたものを持っていると思う
- 自分の思う通りに人を使うのは、それほど難しいことだとは思わない
- 私はよいリーダーになれる自信がある
- 私に接する人はみんな、私という人間をしぜんに気に入ってくれるようだ
- 私はもともとリーダーになるのが性格に合っている
- 私は自分の体をみるのが好きだ
- 私には自分の体を人に自慢したいという気持ちがある

周りの人が私の期待しているだけの敬意を払ってくれないと、気持ちが落ち着かない
人にすかれるのは、私自身にどこか魅力的なところがあるからだと思う

[注目・賞賛欲求]

私には、注目的になってみたいという気持ちがある
どちらかといえば、私は注目される人間になりたい
私は偉い人だといわれる人間になりたい
私は支配欲が強い方だと思う
私は人からほめられることを望んでいる
私は人々を従わせられるような権威を持ちたいと思う
私は強い人間だと思われたい
ここというときには、私は人目につくことを進んでやってみたい

[自己主張性]

どうやら私は、控えめな人間というにはほど遠い人間だと思う
私は自分の意見をはっきりいうほうだ
私はどんなことでも、あまり気兼ねなどしないで自分の好きなように振る舞っている
私は自分で責任を持って決断するということが好きである
どんなことでも、敢えて挑戦するというようなやり方が、私の性格に合っている
これまで私は自分の思い通りのやり方でやってきたし、今後もそうしたいと思う
自分自身の気持ちに忠実に生きることが、まず重要である
いつも私は話している内に、話の中心になってしまう
私は、周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている

資料 本研究で用いた質問項目 (2)*は逆転項目

あなた自身についてお尋ねします。以下のそれぞれの質問について、あなたはどの程度あてはまりますか？ それぞれあてはまる段階に○印をつけてください。

病的自己愛（他者評価過敏）

大事な友だちから怒りを向けられると、自分自身がダメな人間のように感じる
* 自分についての噂ばなしは、適当に聞き流す
他人から「あなたはこういう人だ」と言われると、すぐ自分でもその通りだと思えてくる
他人からの批判には、ぐさっとくる方だ
自分の強いところを見せて他人から尊敬されたい
自分に関する噂を、すぐ本気にしてしまう
大事な友だちを よろこばせることができた時は、自分の価値を実感できる
尊敬する相手から自分が押しのけられるのではないかと心配だ

ボーダーライン・スケール (BSI)

私は自分を傷つけたくなくなる時がある
私は他人との親しい個人的関係を持つことを恐れている
最初に会った時はその人はとても立派に見えてもやがてがっかりすることが多い
私は人生に立ち向かう力がないと感じている
私の内面は空虚だと思う
私は記憶力に問題がある
時に私はバラバラになるように感じる
私は自分が何かを演じているかのように自分を見ている
実際起こったことと想像したこととの区別がよく分からない
私はまるで霧の中に生きているようにはっきりしない
誰か他人の責任を負うことは怖いことだ
私は自分の人生を生きることができないと思っている
私は残酷な考えが浮かんで苦しむことがある
私は長く友人づきあいができない
私は自分を憎んでいる

私は広い場所や市街にでることを恐れている

自尊感情

自分に自信がある
 少なくとも人並みには価値のある人間である
 いろいろな良い素質もっている
 * 敗北者だと思ふことがよくある
 物事を人並みにはうまくやれる
 * 自分には自慢できるところがあまりない
 自分に対して肯定的である
 だいたいにおいて自分に満足している
 * 自分が全くだめな人間だと思ふことがよくある
 * 何かにつけて自分は役に立たない人間だと思ふ

資料 本研究で用いた質問項目 (3)*は逆転項目 a~d. 複数因子への重複項目

友人関係尺度 (岡田, 1999a で因子負荷量の高い順に提示してある)

あなたはふだん 同性の友だちとどのような付き合い方をしていますか? あてはまる段階の数字に○をつけてください。

[自己閉鎖]

* 自分の心をうち明けて話す
 * 悩みごとを相談する
 本当の気持ちは話さない
 a * 友だちの心の支えになろうとする
 お互いのプライバシーに立入らない
 * 落ち込んだとき話を聞いてもらう
 友だちにグチを言わないようにする
 浅い付き合いにとどめる
 b 友だちの内面に土足で踏み込まないようにする
 自分が落ち込んだ姿を友だちに見せないようにする
 * 必要に応じて友だちを頼りにする
 まじめな話題になると冗談でごまかす
 相手に甘えすぎない
 相手の言うことに口をはさまない
 相手の世界に口出ししない
 c あたりさわりのない会話ですませる
 d 自分の内面に踏み込まれないように気をつける

[傷つけられることの回避]

友だちからどう見られているか気にする
 友だちから「つまらない人」と思われないよう気をつける
 友だちからバカにされないよう気をつける

仲間の前で恥をかかないように気をつける
 友だちと同じ持ち物を持つ
 友だちから傷つけられないようにふるまう
 友だちをがっかりさせないように気をつける
 友だちと意見が対立しないよう気をつける
 c あたりさわりのない会話ですませる
 d 自分の内面に踏み込まれないように気をつける

[傷つけることの回避]

友だちを傷つけないようにする
 b 友だちの内面に土足で踏み込まないようにする
 相手に自分の意見を押しつけないよう
 友だちに心配かけないように気をつける
 友だちから無神経な人間だと思われないよう気をつける
 相手の気持ちに気をつかう
 お互いの約束をやぶらない
 相手にやさしくするよう心がける
 a 友だちの心の支えになろうとする

[快活の関係]

冗談を言って相手を笑わせる
 ウケるようなことをする
 楽しい雰囲気になるようふるまう

側面別自己概念

現実自己像: 現在のあなた自身は、以下の言葉についてどの程度「あてはまる」と思いますか? これまでと同じように、あてはまる段階の数字に○印をつけてください。

理想自己像: あなたは、以下の言葉であらわされる人間に、どの程度「なりたい」と思いますか? どのていど「なりたい」かを、これまでと同じように あてはまる段階の数字に○をつけてください。

[心理的側面]

きちょうめんな性格
 自分にきびしい
 責任感がつよい
 もの知り

[身体的側面]

外見がカッコいい
 顔がよい
 頭がよい
 頭の回転がはやい

[社会的側面]

人とうまくつきあえる
 多くの人とつきあいがある
 同年代の異性と楽しく話ができる
 人に対して思いやりがある
 他人にやさしい
 おおらかな人柄である

[活動的側面]

得意なスポーツがある
 特技がある
 熱中している趣味がある
 体力がある
 スポーツマンタイプに見える
 運動神経がある
